

このコーナーでは、農業のちょっとしたコツを、市の営農指導員からお知らせします。

### 営農指導員のワンポイントアドバイス

営農指導員 若山 謙

適期を逃かさず植え付けよう！  
夏野菜から秋冬野菜への衣替え

秋冬野菜を植え付ける準備を  
始めましょう

収穫量が減り、実が小さくなり、葉が黄色くなってきた夏野菜をいつまでも植えたままにしておくことは、秋冬野菜の準備の遅れにつながるため、よくありません。夏の収穫が終われば、古い葉や残った株などを集めて焼却し、害虫や病原菌の発生源を除去しましょう。同時に畑内外の雑草を除去しましょう。

石灰資材を上手に使いましょう

石灰が多すぎたり少なすぎたりすると、作物の病気が発生しやすくなります。また、何年も石灰を投入していない畑では、やや酸性の土壌になっていることがあります。石灰資材（苦土石灰など）を1アール当たり15〜20キロ程度投入し、よく混ざるように耕しましょう。

堆肥の施用を行います

化学肥料ばかり使用して栽培を続けると、土が硬く締まりやすくなるため、堆肥（有機物が完全に分解された肥料）を施用します。堆肥の効果はすぐに現れるものではなく、累積効果が大きいので、作付けごとに施用し続ける必要があります。1アール当たり200〜300キロ程度施用し、よく混ざるように耕しましょう。

堆肥の過剰施用や有機物があまり分解されていない肥料を投入すると、作物は一時的に窒素不足となり、生育の抑制（窒素飢餓）や病害虫の発生が起りやすくなります。肥料は石灰窒素などと混合して積み置きし、有機物の分解を促進してから使うようにしましょう。

種まきと植え付けの適期を逃がさないようにしましょう

秋から冬にかけて収穫できる野菜は、種まきや植え付けが1週間遅れると、収穫が1か月遅れるともいわれます。場合によっては、十分成長せずに収穫できないこともあります。秋から冬にかけてどんな気温が下がっていくため、気候のよい時期に作物がどれだけ大きく育つかが重要です。

問い合わせ

農業振興課 農業振興係  
☎0824・73・1131

## 庄原が好き



口和本の会 岩瀧 朋子さん

このコーナーでは、人と人とのつながりを大切にしながら、自発的なまちづくりに取り組む皆さんをシリーズで紹介します。

原爆が広島・長崎に投下されてから75年が経過し、被爆者の高齢化が進む中、被爆体験の継承が切実に求められています。被爆者が記した体験記や原爆詩には、原爆の恐ろしさや原爆投下直後のことを直接知る人だけにしか書けない、真実や心情が伝わっています。

朗読を通じて戦争と原爆の悲惨さを次世代に語り継ぎ、命の尊さ、平和のありがたさを多くの人に伝えたいと思っています。

### 口和本の会

学校の週5日制が、平成14年に始まったことをきっかけに、休日になった土曜日を生かして、子どもたちの豊かな心を育みたいとの思いから、本の読み聞かせを行うボランティアグループが立ち上がりました。

### 被爆体験記の朗読

平成17年からは、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の「被爆体験記を読み語るプロジェクト」のマネージャに沿って、被爆体験記朗読ボランティアの活動を行っています。

メンバーと一緒に、市内の小中学校や自治振興センターなどを訪れ、被爆体験記や原爆詩、戦没者の遺書を朗読しています。

### #庄原が好き



SNSの投稿募集中  
「#庄原が好き」で投稿！



▲投稿を  
チェック

問い合わせ

自治定住課定住推進係  
☎0824・73・1257